



リヒャルト・シュトラウス(1864~1949) Richard Georg Strauss

★歌曲集『8つの歌』より「何も」Nichts op.10-2

シュトラウスが10代の頃に書いた作品。しっとりとお歌われる作品の多いシュトラウス初期の傑作Op.10においては珍しくユーモラスで快活な曲だが、その美しいメロディもあって印象に残る。ぐちゃぐちゃ語ることができるほど、ぼくの恋人はつまらない人じゃないんだ、っていうおノケがなかなか微笑ましい。

★歌曲集『8つの歌』より「献呈」Zueignung op.10-1

シュトラウスによる最初期の歌曲集『8つの歌』の第1曲である。恋人への想いと感謝を捧げたこの詩は19世紀オーストリアの詩人ヘルマン・フォン・ギルムの作品で、素直な初々しさがある微笑ましい。H.フォーゲルに献呈された。

R・シューマン=F・リスト(1810~1856・1811~1886) Robert Alexander Schumann = Franz Liszt

★献呈

シューマンの歌曲集『ミルテの花』op.25の第1曲「献呈Widmung」をリストがピアノ独奏用に編曲したものである。シューマンは全26曲から成るこの歌曲集を、結婚式の前夜にミルテの花を添えてクララに贈っている。その第1曲を飾る《献呈》は、「あなたは私の心、私の命、私の魂、私の全て」というクララへの溢れる愛に彩られた歌詞がつけられ、情熱的に、高らかに歌い上げる。リストの編曲ではピアノスティックな煌めきと華やかさが加えられ、原曲とはまた違ったロマンティックで美しい作品に仕上がっている。

F・ショパン= F・リスト(1810~1849, 1811~1886) Frédéric François Chopin = Franz Liszt 6つのポーランドの歌より

「ピアノの詩人」ショパンのシンプルで素朴な味わいの歌曲を、「ピアノの魔術師」リストがピアノ独奏用にアレンジした作品。ポーランドの民俗舞曲「マズルカ」のリズムが聴こえてきたり、ショパンの「エチュード」を思わせるテクニックが現れたり...即興の達人でもあったリストの遊び心も感じられる。

★私の愛しい人

「恋する乙女が自分のそばで愛らしく語っているのを楽しげに眺め、やがて心高まってキスをする」という歌で、原曲の旋律も基にリスト独特の細かい音符を使った即興的なパッセージが美しく響く作品である。

★バッカナール

マズルカのリズムに乗り「酒を楽しめ!」と歌う酒宴礼賛の歌である。

エーリヒ・ヴォルフガング・コルンゴルト(1897~1957) Erich Wolfgang Korngold

★オペラ『死の都より』ピエロの唄 Tanzlied

「死の都」というオペラは、ジョルジュ・ロダンバックの小説『死都ブリュージュ』から自由に翻案されている。19世紀末のベルギーのブリュージュが舞台。妻に先立たれた主人公パウルの友人であるフランクがピエロに扮している際に歌うアリア。自分にあった儂げな甘い恋。望郷の思いを歌い上げる。

ジュゼッペ・ヴェルディ(1813~1901) Giuseppe Verdi

★オペラ『マクベス』より 哀れみ、尊厳、愛 Pietà,rispetto,amore

「マクベス」というオペラはシェイクスピアが書いた戯曲を元に作られたオペラ。先代の王を殺して取って変わったマクベスが、自分の半生を悲観しながら歌うアリア。自分の墓に当てられる言葉は侮蔑のみで、哀れみも、尊厳も、愛もないだろうと歌う。

宮城道雄(1894~1956) Miyagi Michio

★春の海

この曲が流れなければ日本の新年はやって来ない、と言っても過言ではないほど、正月の風物詩としてすっかり定着した感のある作品。作曲家の作品の特徴は、西欧クラシック音楽の影響が強く感じられる点で、琴の伴奏もどこかフランス印象派のような雰囲気さえ漂う。この曲が有名になったのは、フランスのヴァイオリニスト、ルネ・シュメーと共に演奏したレコードがきっかけになっている。「春の海」のモチーフは、失明する前に祖父母に育てられて目に焼きついた、瀬戸内の福山市鞆の浦の海のイメージがもとになっている。

アンリ・ヴュータン(1820~1881) Henri François Joseph Vieuxtemps

★ヴァイオリン協奏曲5番 イ短調「ル・グレトリ」作品37

第1楽章: アレグロ・ノン・トロッポ

第2楽章・第3楽章: アダージョ ~ アレグロ・コン・フォーコ

元来1861年にブリュッセル音楽院の卒業試験の課題曲として作曲され、1878年にパリ音楽院の卒業試験の課題曲用に改訂された。名人芸な高度な技巧を要求される作品である。副題の「ル・グレトリ」は、アダージョの部分でグレトリのオペラ「ルシール Lucile」中の旋律が用いられていることによる。単一楽章の構成で、急-緩-急からなっている。序奏のあと、独奏ヴァイオリンが上昇音型を奏でながら登場しロマンティックな旋律を歌い上げる。真中の部分には長大なカデンツァが置かれ、アダージョはヴァイオリンが憂いを帯びた旋律を情感豊かに歌い、憧れに満ちた旋律が一瞬現れる。後半は長調に転じ、その憧れに満ちた旋律が堂々と奏でられる。最後は激しいVパッセージを一気に弾き切る。



おかだ ゆみ

★岡田 祐美 ヴァイオリン Okada Yumi

愛知県立芸術大学を首席で卒業、桑原賞を受賞。渡米後インディアナ大学にてパフォーマンスディプロマを取得。ボストンのロンジー音楽院に Lia.G and Willam.J. Poorvu 全奨学金を得てアーティストディプロマを得、大学院修了。2001~2007各年の定期公演ニューイヤーコンサートにてアルテフィイルハーモニーと共演。ボストンのラジオ番組 "Mark's Classical Caravan" に招かれ演奏、好評を得る。

2005年ニューイングランド国際室内楽コンクールにて3位を受賞。2006年愛知文化振興事業団主催のコンクールに柳河瀬貴子とのデュオで優勝し、愛知芸術文化センターでの演奏会に出演。近年Longy Concerto コンクール、Honorsコンクールに優勝。2004年アメリカ最大の室内楽コンクールとして知られるFischhoffコンクールではセミファイナリストとして選ばれ、またニューヨークのアーティストインターナショナルコンクールより特別賞を受賞。その夏にはカナダのBanff Festivalにゲストアーティストとして招かれ演奏する。

現在、2002年より入団したボストンフィルハーモニーの第一ヴァイオリン奏者として活動しているほか、2006年よりワシントン・シムフォニエッタのコンサートマスターに就任し、ボストンとワシントンD.C.の2つの都市で活躍している。またコンコード音楽院、ニューイングランド音楽学院ユースオーケストラの講師として後進の指導にも力を入れている。